

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題B】 口頭発表①

Chair: Yoshio Takahashi

Thu. Aug 31, 2023 9:00 AM - 9:59 AM RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

9:30 AM - 9:44 AM

[競技スポーツ-B-03] 小学校低学年のサッカーにおける団子状態の形成契機 (方)

*Michiyuki TERADA¹ (1. Osaka International University)

サッカーのゲーム位相は瀧井 (1988 ; 1990, p.80 ; 1995 ; 2003) によってまとめられている。このゲーム位相の第一位相は密集とされている。プレーヤーがボールに集まってしまう、団子のような外形が捉えられることから、第一位相は団子状態とも呼ばれる。そして、このような状態で試合が展開されるサッカーは通俗的には団子サッカーと呼ばれる。

指導者の間では、団子サッカーの良し悪しは二分される。そのような中、「なぜ、団子状態が形成されるのか」に関する学術的議論は見受けられない。この素朴な問いは「いつ、どのように団子状態から脱却させるか」の問いに繋がり、延いてはプレーヤーの競技力向上やサッカー指導に関係する。

団子状態が形成されてしまうことを、(とりわけ、子どもや初心者のサッカーでは) 「そういうもの」と受け入れることや無自覚のうちに瀧井のゲーム位相論を受け入れることを、一旦、「括弧入れ」することで、新たな知見を得ることができると考えられる。

そこで本研究では、スポーツ運動学 (金子, 2009) の立場から小学校低学年のサッカーを分析することによって、団子状態の形成契機を明らかにすることを目的とする。

分析の結果、以下の四つの契機を明らかにすることができた。

- 1) ボールを奪う意識
- 2) 競技力 (達成力) のレベル
- 3) 指導者の指導
- 4) ゲームのオーガナイズ

小学生低学年のサッカー指導において、指導者がどのような目標像を形成するかは、子どもたちの競技力に大きな影響を与える。団子サッカーの良し悪しではなく、指導者は目の前の子どもたちは「どこを目指しているのか」、あるいは「どこまで目指せるのか」といったことを熟考し、目標像を形成して指導することが重要であると考えられる。本研究で得られた知見が現場に生かされることを願う。